

—時代のなかの学生と学問—

早稲田で

学

ぶ

大学史資料センター秋季企画展



近代化のなかで

—1880~1910年代—

1882年10月、東京専門学校は、わずか80名の学生を迎えて出発した。小野粹が掲げた「学問の独立」の理念には、外国の学問からの独立という意味が込められ、東京専門学校では、外国語で教育が行われる東京大学（帝国大学）に対し、日本語によって専門学を速成する教育方針が採られた。

「学問の独立」のもう一つの含意は、政治からの独立にあり、学内には学生の個性を尊重する自由な雰囲気があった。自由民権運動から憲法の発布、そして議会開設へと続く近代国家建設の過程のなかで、初期の学生の間には、権力におもねらない反骨精神、反官僚意識、強い政治志向が育まれた。授業も、そうした学生の気風を醸成する基盤となった。擬国会として知られる政治経済学科の「国会演習」は、議会開設に先んじて始められ、一授業の枠を超え、学内外の注目を集める早稲田の名物イベントとなった。

1902年10月、東京専門学校は開校20周年を期して「早稲田大学」へと改称する。大学部には政治経済学科、法学科、文学科に続き、商科、理工科が新たに設置された。また、附属学校として、専門部や高等師範部、工手学校などが次々に発足した。さらに、国内改革の一環として日本への留学生派遣を推進した清国の留学生を迎え入れる特設機関として、清国留学生部が設置された。早稲田大学は多種多様な学生が国内外から集う一大教育機関へと成長を遂げ、学生数は、開校から30年を迎える頃までに、大学部だけで3,000名以上、附属学校・機関を加えれば10,000名に達した。

学科・附属学校等の拡充と学生数の増加に合わせて、校地の拡大と新しい校舎の建設、学習環境の整備も進んだ。早稲田大学に改称した1902年には、書庫・閲覧室の2棟からなる図書館が開館した。1911年には、教員の研究室のほか、理工科の教室・実験室や階段教室を備えたレンガ造の恩賜記念館が竣工した。開校当時の校舎もまだ健在だったが、周囲に田圃が広がるのどかなキャンパス風景は、着実にその姿を変えていった。

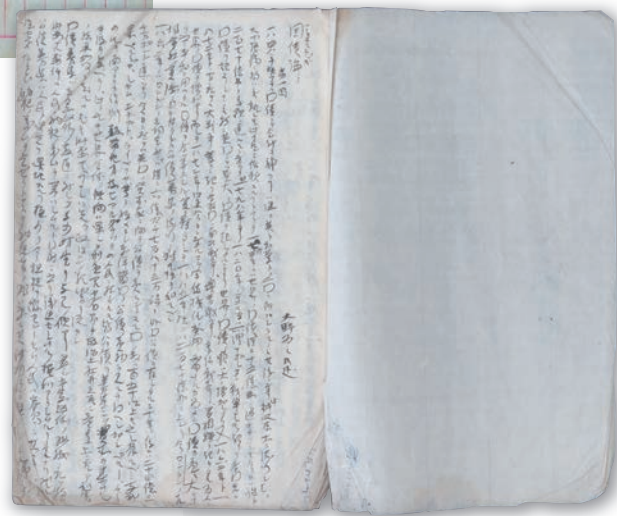
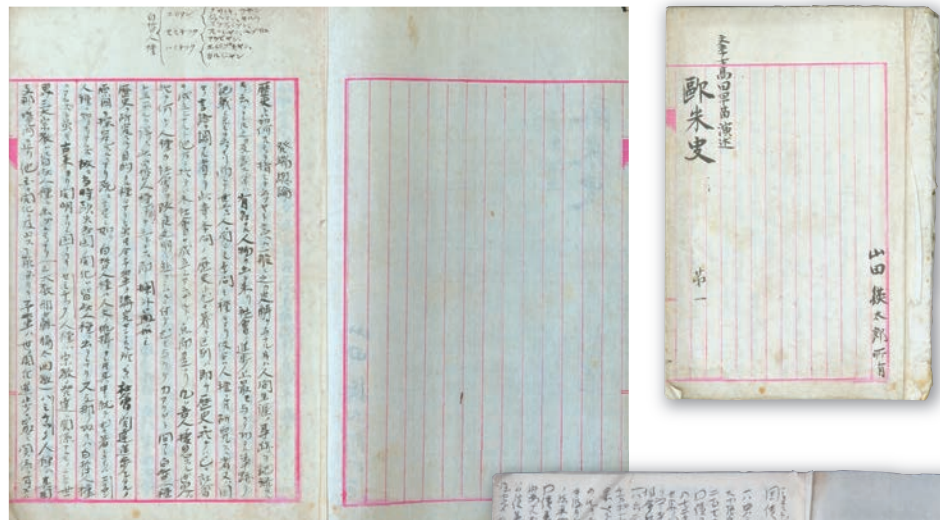
左：キャンパス風景（校庭周辺）1912年頃

右：田中穂積の講義風景（大学部政治経済学科）（「政治経済学科卒業記念帖 大正6年」1917年より）

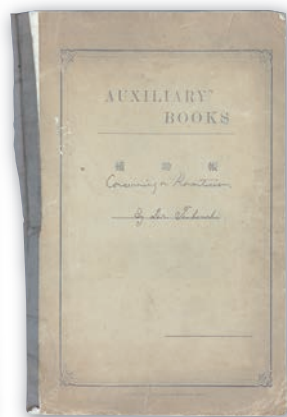
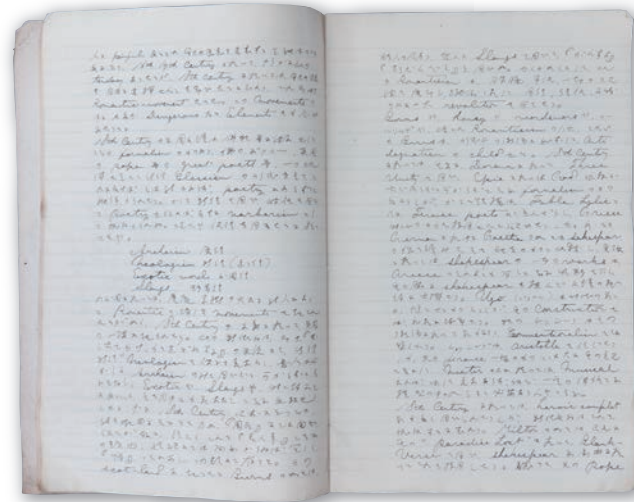


図書館閲覧室風景（「政治経済学科卒業記念帖 大正4年」1915年より）：左
擬国会の様子（同上）：右

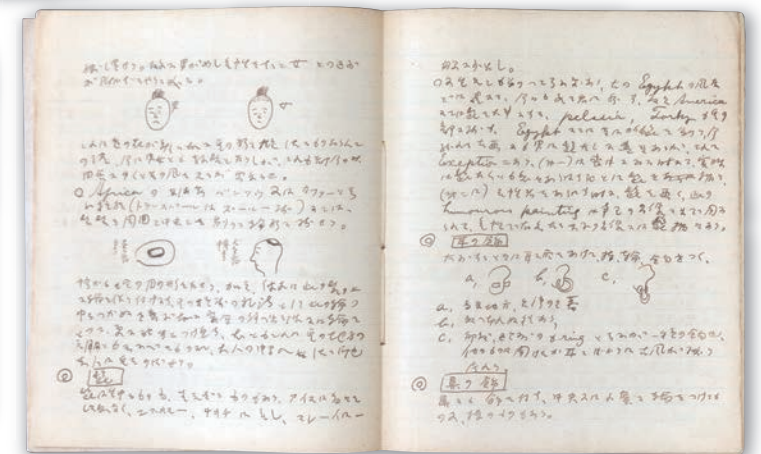
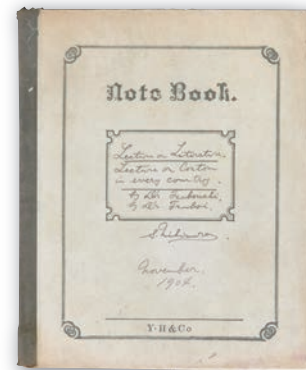
年	月	事 項（太字は国内・世界の動き）
1882年	10月	東京専門学校開校
1886年	1月	小野粹死去
1888年	10月	擬国会始まる
1889年	2月	大日本帝国憲法発布
1890年	11月	帝国議会開設
1894年	8月	日清戦争始まる
1898年	6月	第1次大隈内閣成立
1901年	4月	高等予科（大学部予備門）発足
1902年	10月	創立20周年記念式、早稲田大学に改称、図書館開館
1903年	9月	高等師範部発足
1904年	2月	日露戦争始まる
1904年	9月	大学部商科発足
1905年	9月	清国留学生部発足
1907年	4月	大隈重信が総長に就任
1907年	10月	創立25周年記念式典、大隈重信銅像（大礼服姿）除幕式、校歌を制定
1909年	9月	大学部理工科発足
1911年	5月	恩賜記念館竣工（1918年、増築完了）
1912年	1月	中華民国成立（2月、清朝滅亡）
1913年	10月	創立30周年記念式典で大隈重信総長が教旨を宣言
1914年	4月	第2次大隈内閣成立
1914年	7月	第1次世界大戦始まる
1917年	3月	ロシア革命起こる
1917年	6月	天野為之学長の後任と大学改革をめぐる早稲田騒動起こる
1919年	3月	朝鮮で3・1独立運動起こる
1919年	5月	中国で5・4運動起こる



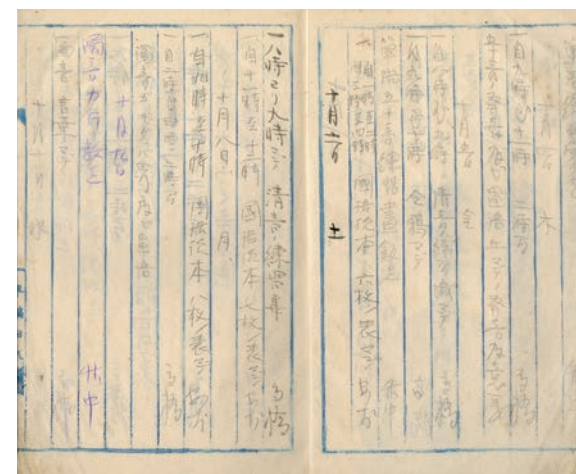
開校当初の教壇に立ったのは、東京大学を出たばかりの高田早苗・天野為之・坪内逍遙ら。薄給で、かつ、多数の科目・講義時間を受け持っていた。



上：高田早苗「歌米史」受講ノート（1882年）山田英太郎（1885年邦語政治科卒）
 中：天野為之「国債論」受講ノート（1888～1890年頃）大塚藤一郎（1890年邦語行政科卒）
 下：坪内逍遙「Concerning on Romanticism」受講ノート（1903～1905年頃）西村真次（1905年国語漢文及英文学科卒）

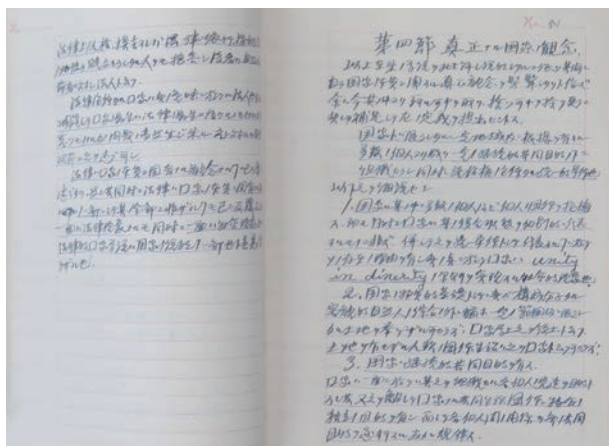
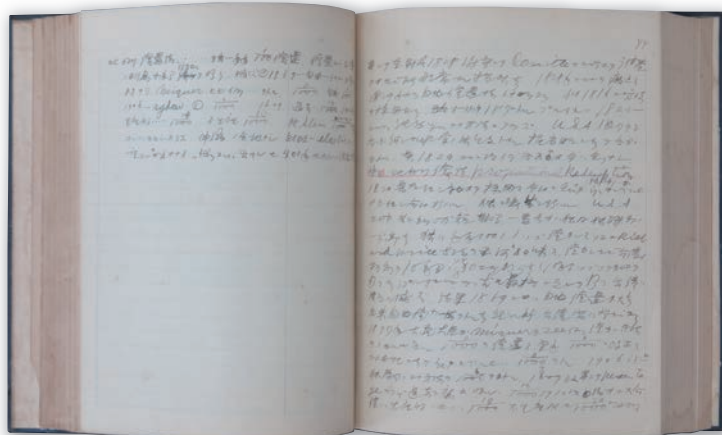
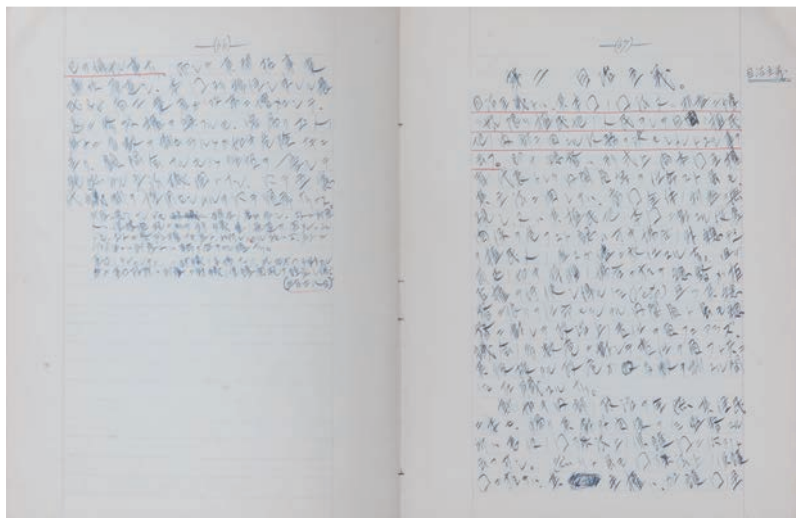


織田萬「行政法」受講ノート（1894～1895年頃）小山松寿（1895年邦語法律科卒）：上
 坪井正五郎「諸国風俗談」受講ノート（1903～1905年頃）西村真次（1905年国語漢文及英文学科卒）：下

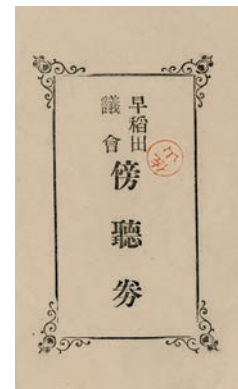


清国留学生部における毎日の授業内容と担当教員が記される。

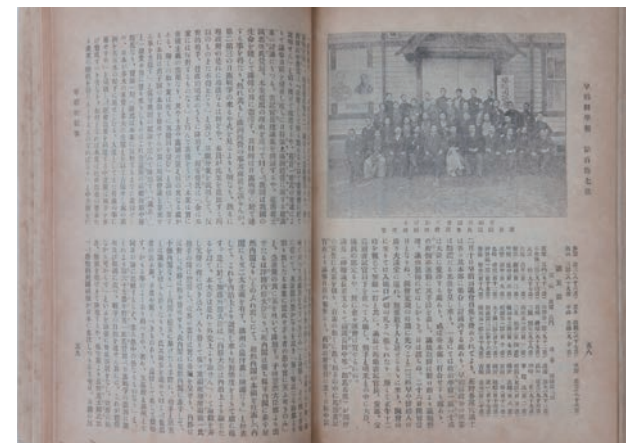
教場日誌 庚班（1905～1910年頃）清国留学生部



上：永井柳太郎「植民政策」受講ノート（1910～1912年頃）高野清八郎（1912年専門部政治経済科卒）
 中：田中穂積「財政学」受講ノート（1917～1918年頃）金澤雅志（1918年大学部商科卒）
 下：大山郁夫「国家学原理」受講ノート（1915～1917年頃）勝田友三郎（1917年大学部政治経済学科卒）



政治経済学科の授業「国会演習」において行われた擬国会は、「早稲田議會」の名で呼ばれるようになり、教員や招聘された（実際の）議員・官僚らが閣僚・政党の代表・政府委員役を、学生が一般議員役を務めた。擬国会には、毎回、数千の聴衆が学内外から集まったが、1920年の大学昇格に伴うカリキュラム再編に伴って終焉を迎えた。



早稲田議會（擬国会）開催通知・傍聴券 1904～1905年：上
 第13早稲田議會の模様を詳報する「早稲田学報」早稲田学会発行 1905年5月1日：下

創立20年を経る頃には、早稲田出身の教員が登場する。論壇でも活躍して大正デモクラシーを牽引した大山郁夫は永井柳太郎と学生時代の同期。永井と田中穂積の講義振りには、「先生こそは雄弁中の鏘々たるものにて候…この雄弁を以て社会政策と殖民政策との深遠なる研究を発表す。学生の人気の翕然として集る」（永井）、「立板に水を流す様な弁舌と、キビキビしたる態度とが累をなして不評判なるはお気の毒にて候」（田中）といった批評が残る（雑誌『青年』1914年8月号）。



学生の姿をユーモラスに紹介する本書では、「ナマケ振り」を天下に誇る文科、寒い旧校舎でオットセイのように厚着をする政治科、ストーブのある新校舎で朝から晩まで勉強に没頭する理工科、「高襟」（ハイカラ）で要領のよい商科、などと紹介される。学科の新設と学生の増加は、学科それぞれに特徴的な気質を生み出していった。

校風漫画 近藤浩一路著、博文館発行 1917年

「改造」の潮流と戦争の足音

—1920~1930年代—

デモクラシーの潮流のもと、1920年代には社会的諸矛盾の是正を求める動きが広まった。労働運動や普選運動をはじめとする様々な運動が高揚し、社会主義が広がり、「改造」が時代のキーワードとなった。早稲田大学は、こうした新思潮の震源地の一つとなった。他方、産業構造の変化と学校教育の浸透は、サラリーマンのような新たな社会階層を生み出し、大衆社会化が進展した。

1920年2月、早稲田大学は大学令に基づく正式な大学となる。早稲田にはさらに多くの学生が集うようになり、その数は、1920年代半ばの時点で14,000名余りとなっていた。

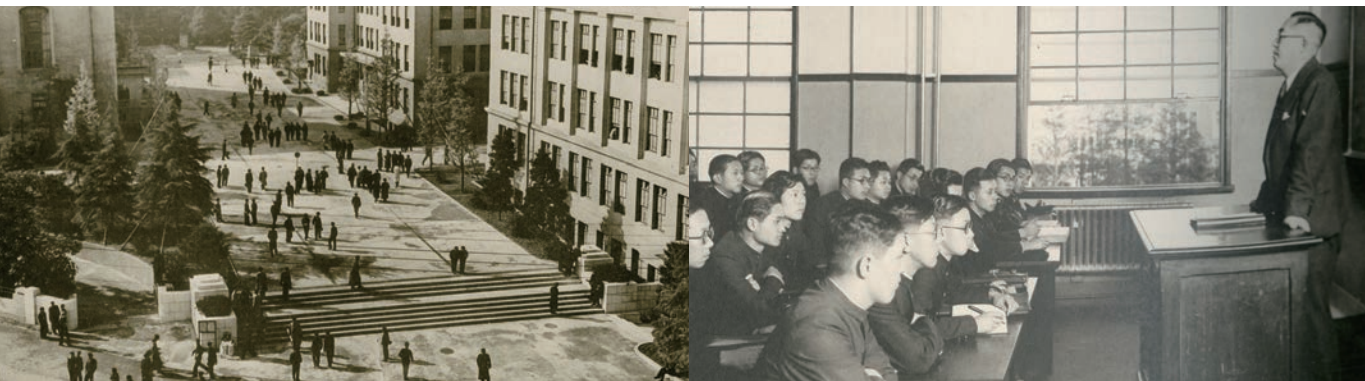
キャンパスの景観も大きく変貌した。学生数と蔵書の増加に応えるため、1925年に新図書館（現在の2号館）が開館した。1930年代に入ると、明治期に建てられた木造校舎に替わって、鉄筋コンクリート造の耐久校舎が続々と竣工した。

教育内容・教授方法の充実も図られた。大学昇格に際し、早稲田大学は教育の基本方針に「自知自覚」を掲げ、自学自習の精神を重視した。この方針に沿って、自修的研究と詰込主義排除を旨とする学制改革が実施され、選択科目や演習討論が拡充された。

社会運動・政治運動が高揚する一方で、治安当局はそれらの運動や思想への警戒と取り締まりを強化していく。とりわけ、社会主義・共産主義への弾圧は徹底され、その波はキャンパスにも及んだ。1923年には佐野学・猪俣津南雄両講師の研究室が搜索され、学内外に強い衝撃を与えた。大学の運営も、次第に、政府や治安当局の意向を無視できないものとなっていった。「改造」の思潮を主導し、学生にも大きな影響を与えた大山郁夫は、1927年、無産政党である労働農民党の中央執行委員長就任を機に、学生の留任運動にもかかわらず解職された。同時期、新聞学会・雄弁会など多くの学生諸団体が解散に追い込まれた。

1931年9月の満州事変勃発を機に、日本は国際的な孤立と戦争への道を進む。その過程で、教育に対する統制も強められた。1927年から始まった軍事教練には、事変後、野外教練が加わった。1936年には、早稲田でも御真影と教育勅語の謄本を奉戴し、紀元節・天長節・明治節の奉祝行事を実施するようになった。

左：キャンパス風景（大隈講堂からの眺望）（「商学部卒業記念写真帖 昭和12年」1937年より）
右：島田孝一の講義風景（商学部）（同上）



年	月	事 項（太字は国内・世界の動き）
1920年	2月	大学令に準拠した大学に昇格
1921年	4月	初の女子聴講生入学
1922年	1月	総長大隈重信死去
1922年	3月	鉄筋コンクリート造の第二高等学院校舎竣工（耐久校舎の嚆矢）
1923年	5月	一部学生による軍事研究団が発足し、反軍国主義の学生と論戦・乱闘（軍事研究団事件）
1923年	6月	治安警察法違反の嫌疑で佐野学・猪俣津南雄の研究室搜索される（研究室蹂躞事件）
1923年	9月	関東大震災
1925年	4月	治安維持法公布
1925年	5月	普通選挙法成立
1925年	10月	新図書館（現2号館）開館
1927年	1月	労働農民党委員長に就任した政治経済学部教授大山郁夫を解職（大山事件）
1927年	6月	配属将校が着任し軍事教練始まる（講話中心）
1928年	6月	新聞学会解散（翌年にかけて学生諸団体の解散相次ぐ）
1928年	10月	演劇博物館開館
1931年	5月	旧文学部校舎（本学最初の校舎）を東伏見運動場に移築し、跡地に鉄筋造の新校舎が竣工
1931年	9月	柳条湖事件（満州事変始まる）
1932年	4月	自修的研究と詰込主義排除を基調とする学制改革（カリキュラム再編）を実施
1932年	5月	5・15事件起こる
1932年	10月	大隈重信銅像（ガウン姿）・高田早苗銅像除幕式
1933年	7月	軍事教練で野外教練始まる
1935年	10月	正門が現在の位置へ移動
1936年	1月	この年から紀元節・天長節・明治節に奉祝行事を実施することを決定
1936年	2月	2・26事件起こる

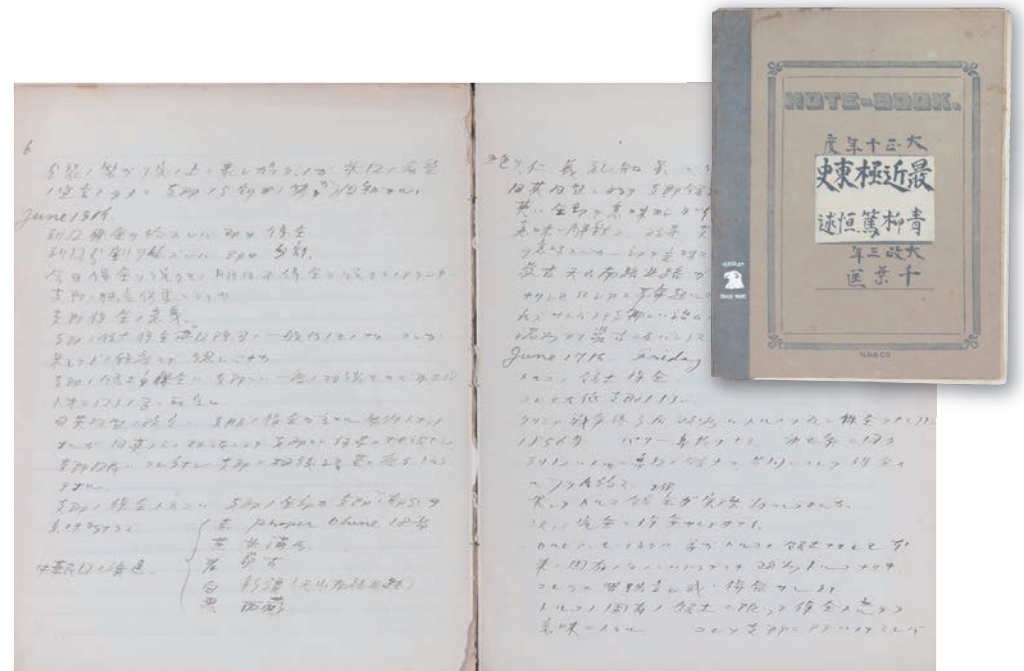
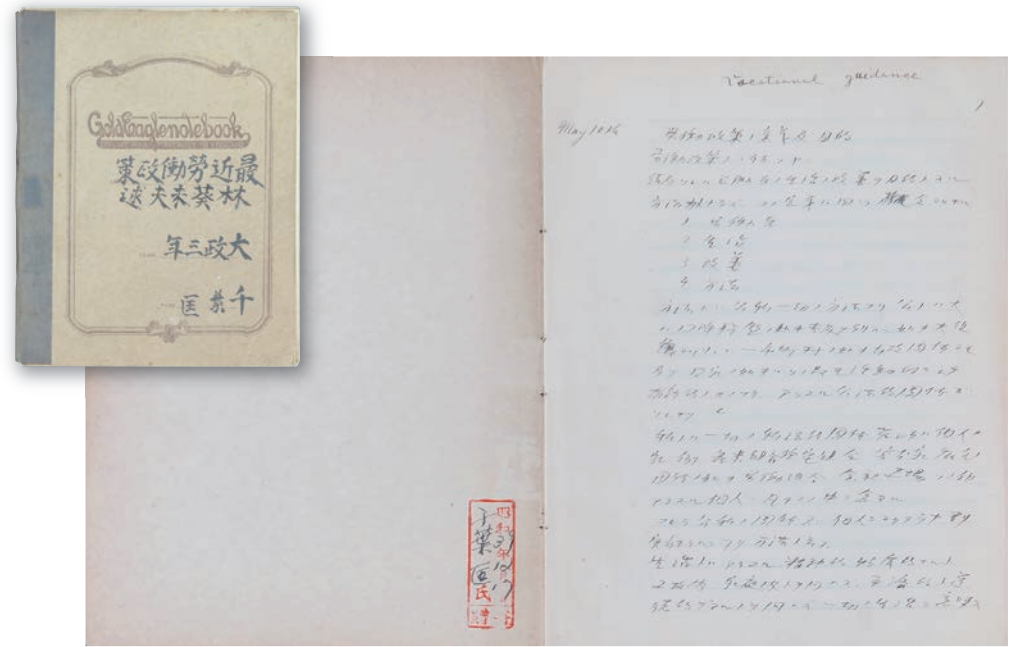
久保田明光のゼミナール風景（政治経済学部）（「早稲田大学政治経済学部経済科卒業記念」1937年より）：左
新図書館閲覧室風景（同上）：右





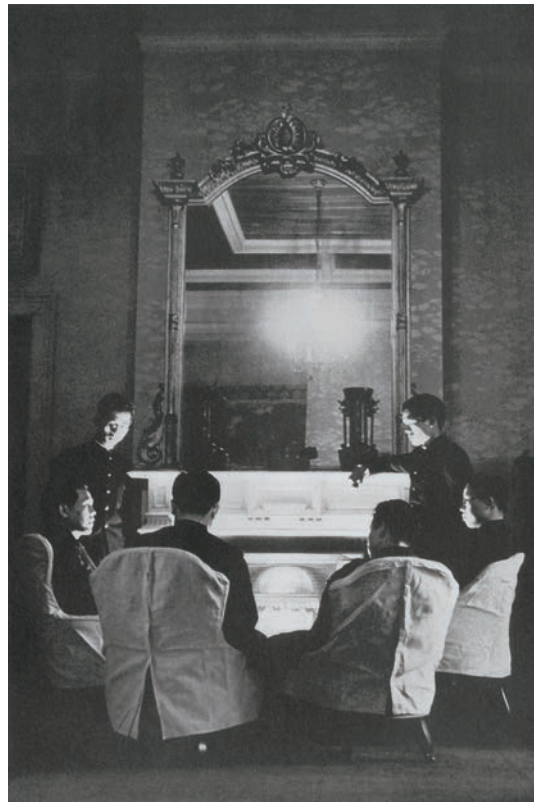
「月 珍らしい寫眞
が出來たから」
さ友人Kから上
掲の寫眞が送つ
て來た。なるほ
ど外岡教授を前
にして假寐の夢
とは！こんな奴
が落ちるのだ。
とよく見るとな
んだ俺のあさま
しき姿である！
前言取消。

月×教の社會學休講
×館へ入らうと思つた。
圖員入らうと思つた。
ながし一杯茶を消
！しやうとす。はなは
費の出の厚い者でな
顔の皮やうに厚い者
は、來るは居た。男
と見ると、娘だ。男
紅茶飲ませた。男
い氣なもた。男

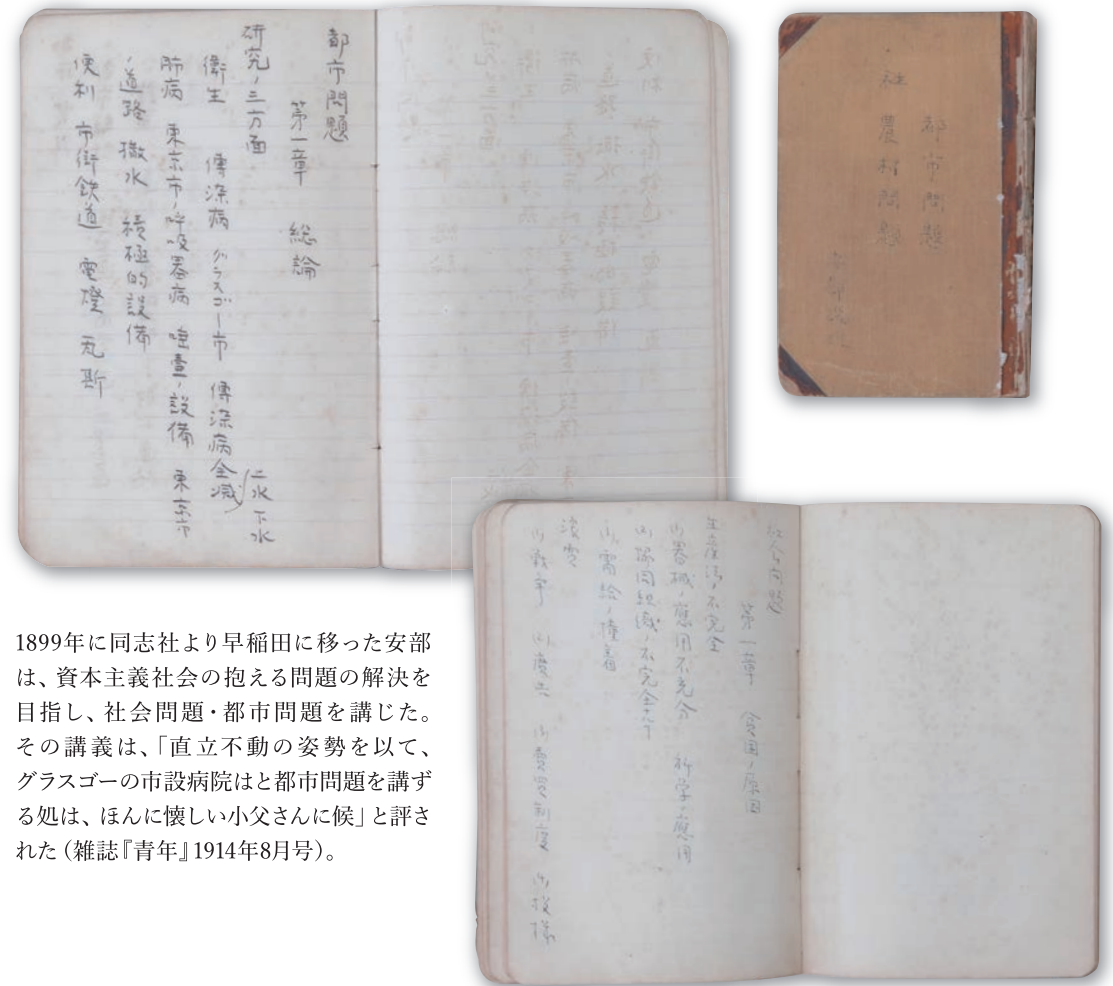


上：新図書館閲覧室風景（「商学部卒業記念写真帖 昭和12年」1937年より）
下：「新解釈学生日記」（「法学部卒業記念 昭和7年」1932年より）

林未夫「最近労働政策」受講ノート（1921年）千葉国（1922年政治経済学部卒）：上
青柳篤恒「最近極東史」受講ノート（1921年）千葉国（1922年政治経済学部卒）：下



左:「大隈会館婦人応接室に杉山先生を囲んで談論する」(「早稲田大学政治経済学部経済科卒業記念」1937年より)
 右:「下宿に集ってノートを引合わせる」(同上)



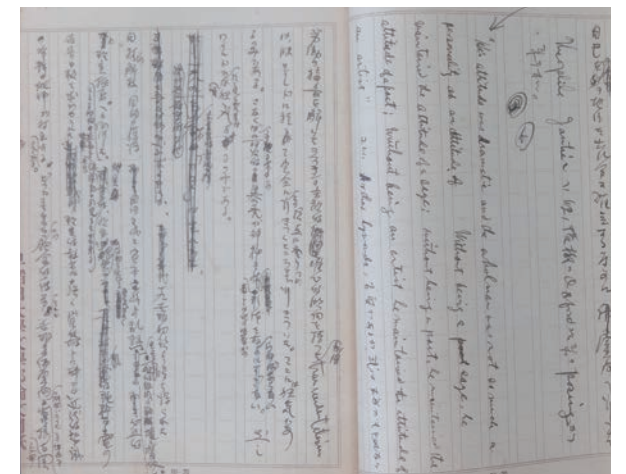
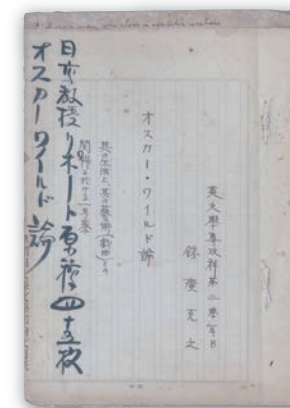
1899年に同志社より早稲田に移った安部は、資本主義社会の抱える問題の解決を目指し、社会問題・都市問題を講じた。その講義は、「直立不動の姿勢を以て、グラスゴーの市設病院はと都市問題を講ずる処は、ほんに懐しい小父さんに候」と評された(雑誌『青年』1914年8月号)。

「都市問題 農村問題」講義ノート(1913~25年頃) 安部磯雄:上
 「社会学」「社会問題」講義ノート(1920~1923年頃) 安部磯雄:下



理工学部採鉱冶金学科の鉱山実習報告書 1910~30年代

理工学部採鉱冶金学科のカリキュラムには、鉱山・炭鉱での実習が組み込まれていた。学生は約1ヶ月間、実習先の鉱山・炭鉱に滞在し、採掘技術や労働状況を克明に記録した。



「オスカーワイルド論」(日高只一講義課題) 課題レポート草稿(1929~1931年頃) 銭廣克之(1932年文学部卒)

戦争と荒廃、そして復興

—1937~1952年—

1937年7月、日本は中国との全面戦争に突入する。総力戦体制の構築が進み、あらゆる人材と資源が戦争遂行のために動員されるなかで、早稲田大学もまた、国策に順応していった。

戦時下で新設された鑄物研究所や興亜経済研究所などの研究機関、あるいは、「東亜の文化開発に雄飛すべき青年学徒を養成」するとして特設東亜専攻科は、戦争遂行のための技術や理念、人材を提供する役割を担った。その一方、反戦的、自由主義的、反天皇制的と見なされた教員に対する当局からの圧迫が強まった。津田左右吉や京口元吉が大学を追われ、帆足理一郎・西村真次・林癸未夫の著作が、発禁・絶版や一部削除などの処分を受けた。

カリキュラムも戦争遂行に適合的なものへと再編された。軍事教練は必修科目となり、「国是即応、体力錬磨、集団訓練」を目的とする学徒錬成部が新設された。学生が学問と向き合う日常は次第に切り詰められ、やがて、戦争一色となった。日本が対米英開戦に踏み切った1941年12月には繰り上げ卒業が始まり、在学期間を短縮された卒業生が戦場へと赴いていった。1943年には、それまで学生に与えられていた徴兵猶予の特典が廃止され、5,000名余りの文科系学生が一斉に入営・応召した（学徒出陣）。残留学生に対する軍需工場や建築現場への勤労働員も強化された。戦争末期には、国民学校初等科を除く全教育機関で授業が中止されるに至り、早稲田大学もその教育機能を停止した。

戦争はキャンパスにも大きな被害をもたらした。1945年5月25日の空襲によって、恩賜記念館や大隈会館（旧大隈邸）をはじめ、レンガ造・木造建築は壊滅的打撃を受けた。新しい耐久校舎の被害は比較的軽微だったが、キャンパス全体の3割が損害を受け、多くの校舎が使用不能となった。

それでも、戦争終結直後の1945年9月には、灯火管制によって窓ガラスがタールで塗りつぶされたままの薄暗い教室で、授業が再開された。戦地や動員・疎開先から、徐々に学生も帰ってきた。こうして、早稲田に再び、学問に勤しむ学生たちの姿が戻ってきた。

左：軍事教練の様子（「商学部卒業記念写真帖 昭和12年」1937年より）

右：空襲で被害を受けた文学部校舎（早稲田大学図書館所蔵「早稲田大学戦災写真」より）



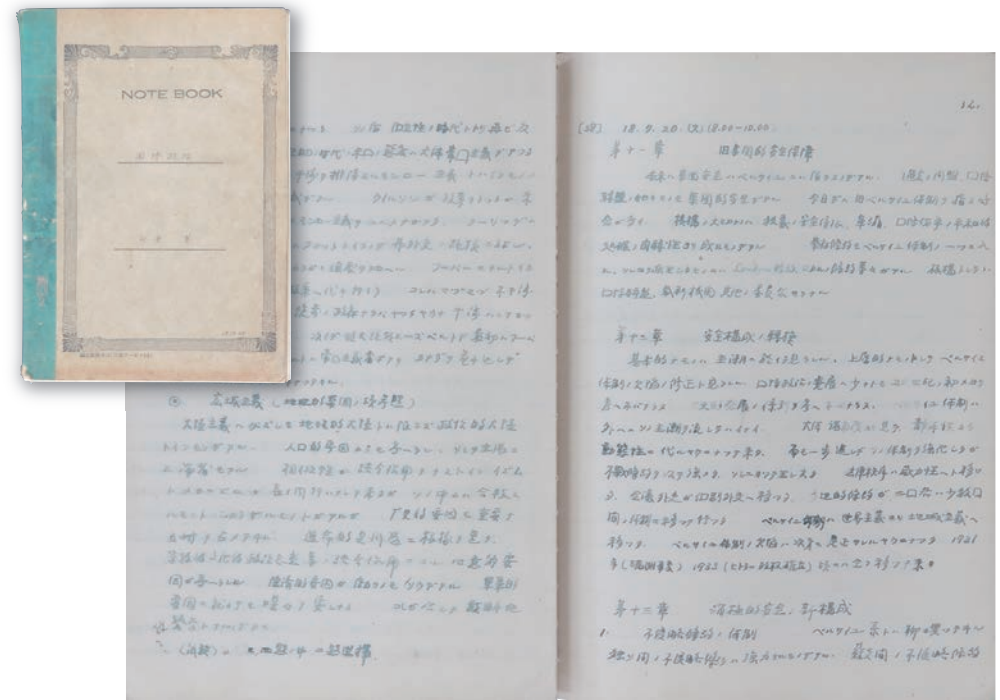
年	月	事 項（太字は国内・世界の動き）
1937年	7月	盧溝橋事件（日中戦争始まる）
1937年	11月	教旨を刻んだ建学之碑と国旗掲揚場の除幕式
1938年	4月	国家総動員法公布 。「東亜の文化開発に雄飛すべき青年学徒を養成」を掲げる特設東亜専攻科設置
1938年	10月	鑄物研究所開所
1939年	2月	女子の学部入学を認めるため学則を変更（4月、4名の女子学部生が入学）
1939年	4月	軍事教練が学部で必修科目化
1939年	9月	第2次世界大戦始まる
1940年	1月	当局に学説を問題視された文学部教授津田左右吉を解職（津田事件）
1940年	10月	「国是即応、体力錬磨、集団訓練」を目的とする学徒錬成部を新設
1940年	11月	興亜経済研究所開所
1941年	8月	早稲田大学報国隊が結成され学徒勤労働員始まる
1941年	12月	対米英開戦（太平洋戦争始まる） 。修業年限を短縮した繰上げ卒業始まる
1943年	9月	学生に対する徴兵猶予特典を廃止
1943年	12月	文科系学生・生徒約5,000人が入営（学徒出陣）
1945年	4月	国民学校初等科を除く学校授業を向こう1年間停止
1945年	5月	空襲により恩賜記念館・大隈会館（旧大隈邸）など焼失
1945年	8月	日本がポツダム宣言を受諾して戦争が終結 。連合国軍総司令部（GHQ）設置
1945年	9月	授業再開
1946年	6月	GHQ指示のもと、軍国・国家主義者追放のための教員適格審査を開始
1946年	11月	日本国憲法公布
1947年	3月	教育基本法・学校教育法公布
1947年	10月	大山郁夫、15年間のアメリカ亡命生活を終え帰国（翌年、本学に復職）
1949年	4月	学校教育法に基づく新制早稲田大学の設立。教旨を改訂して「立憲帝国の忠良なる臣民として」の語句を削除
1951年	9月	サンフランシスコ講和条約調印（翌年4月、発効しGHQによる占領終わる）

空襲で倒壊した理工学部校舎（早稲田大学図書館所蔵「早稲田大学戦災写真」より）：左
講義風景（理工学部）（「昭和26年度卒業記念 早稲田大学第一理工学部機械工学科」1951年より）：右



1950年頃の図書館。閲覧席には、1939年から学部入学が認められるようになった女子学生の姿もみえる。

図書館閲覧室風景(「昭和26年度卒業記念 早稲田大学第一工学部機械工学科」1951年より)

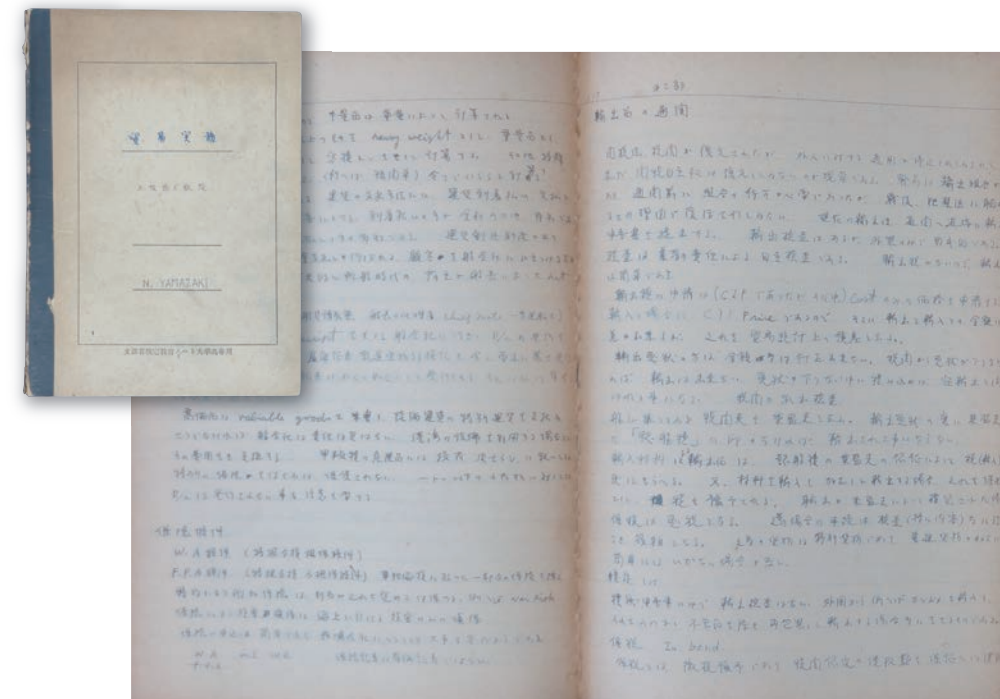


講義は現在進行形の世界大戦に言及して締めくくられる。川原篤(政治経済学部教授)は1944年6月に応召。1945年1月、中国の漢口で戦病死。

「国際政治」講義ノート(1943~1944年)川原篤



「学生生活の一齣」(「昭和27年第一商学部卒業記念アルバム」1952年より)



上坂西三「貿易実務」受講ノート(1950~1951年頃)山崎直幸(1951年第一商学部卒)



大学史資料センター秋季企画展

早稲田で学ぶ一時代のなかの学生と学問

会 期：2020年10月2日(金)～10月30日(金)

会 場：早稲田大学歴史館 企画展示ルーム

開館時間：10:00～16:00